
さみだれがみ

李孟鑑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さみだれがみ

【Nコード】

N4002M

【作者名】

李孟鑑

【あらすじ】

五月雨の夜、陶子は胸に思いを秘めながら、いとしい人の髪を梳いた。そしてその人、大内義弘もまた、陶子の髪を梳いてくれた。少女時代をほんの束の間、彩った恋は、たとえ幼くとも、陶子には生涯の恋であった。

人物紹介

主人公・陶子とっこの周りの人々

大内義弘よしひろ

左京権大夫、権大夫。周防大内家の第二十五代当主。前年、將軍足利義満に従って上洛し、在京中。

今川泰範やすのり

上総介。陶子の父。今川了俊の甥である。

今川了俊りょうしゅん

高齡の身ながら現在も九州で探題職を務める。陶子の大叔父。作中では名前のみ登場。

今川仲秋なかあき

了俊の弟。仲秋の娘が、義弘の正室である。作中では名前のみ登場。

(一)

小倉の山向こうから来た雨は嵯峨野さかのの一帶を覆い、そのままに、やがて日は暮れた。陶子とうこは塗り碗を小さな盆に乗せ、廊下を渡って行った。先に行く侍女が掲げる灯明の明かりを受けて、陶子の首筋が闇の中にほんのりと浮き上がっている。細く、白く、陶器のように華奢な首元に、椀から立ち昇った湯気が吹き流されて漂った。舞ま良戸一枚隔てた向こうに、しとしとと雨音が鳴った。

杉障子の隙間からは、かすかに明かりが洩れていた。金糸のような洩れ灯に、陶子は口を寄せた。

「権大夫様」

ややあつて、男の、低い声が返った。

「陶子殿にござるか」

「はい。お邪魔してもよろしゅうございますか」

「よろしいですよ」

傍らから侍女が手を伸べて杉障子を引き開け、赤銅色の光が洩れ流れた。陶子は開いた戸の隙間から、小さな子供が大人の様子を窺う時のように、小首をかしげて室内を覗き込んだ。

権大夫様と陶子が呼んだその人、大内左京権大夫義弘よしひろは、床に座りこちらを半ば振り返った格好で、陶子を迎えた。書見をしていたらしく、斜交はすかいにひねった体の向こうに、書見台と、そばに灯明が

あつた。太い首や、彫深い小鼻の脇に炎が強い陰影を作り、白い肌を際立たせている。紺の衣を纏まとった広い背中が、床をうずめるように大きく影を作っていた。部屋に入る前に小首をかしげて一度中を覗き込む陶子と、書見台や文机から向き直りながらそれを迎える義弘と。昨日までと何ひとつ変わらぬ光景であつた。

「まだお休みにならないのですか」

陶子が尋ねた。

「明日はお発ちになられると申しますのに」

「大袈裟ですな。堀川の自分の屋敷に戻るまでのことに、さほど気負うこともありませんまい。どのみち休むには少し早過ぎますからな、こうして書見など致し、時をつぶしておりました」

義弘は笑つて、もどりの辺りに爪を差し入れしきりと搔きながら、書見台の本を閉じた。杉障子が背後に閉まり、侍女の足音が遠ざかつて行つた。陶子は携えた盆を、義弘の膝元へすすめた。うるみの塗り椀に、褐色に濁った汁が入っていた。

「お休みの前に飲んでいただくと思つて、お持ち致しましたの」

「薬湯ですか。これはかたじけない」

義弘は椀を取り上げた。縁に口を寄せ、息で冷ましながらすすり上げた。白い湯気が吹きちぎれて、闇間に溶けた。

「苦いですか」

椀をすする義弘の表情を察して、陶子が可笑しそくに訊いた。

「少々、苦うござりまするな」

「残してはなりませんよ」

義弘が椀を盆に戻しかけたのを、陶子は怖い顔で制した。

「一体、何に効く薬ですか」

「体が温まって、よく眠れます」

「左様にございましたか。わたしはてつきり、眠気払いの薬湯かと」

冗談を言つて、義弘は椀を取り直した。

風にあおられていつとき雨が屋根の上に強まり、雨音が、向き合つて座る陶子と義弘の頭上に、急に厚みを持って覆いかぶさつた。

「ふた月もの間、皆々様にはまことに世話になり申した」

雨音の中で義弘が言つた。

「急な話であつたにも拘らず、三条殿も陶子殿も快く迎えて下さいました。おかげで京の春を心ゆくまで堪能し、詩囊しゆを肥やすことが出来申した」

「そうおっしゃっていただくとわたくしも嬉しゅうございますわ。けれどもね、権大夫様、嵯峨野がお気に召したのであれば、もう少し屋敷においで下さればよろしゅうございますのに。わたくしも、

母も、構わないのですもの」

「かたじけない。ではその言葉に甘えて、また遊びに参ります」

からりと義弘は笑った。父と歓談する時よりも、酒の席で皆に冗談を言う時よりも、部屋で陶子と二人過ごした時に一番よく見せた笑顔である。初夏の陽光のぱっと閃くような、それは陶子の最も好きな笑顔だった。

(二)

義弘は薬湯を飲み終え、空になった椀を膝元の盆の上に戻した。と、頭をうつむけたはずみに、鬚まげがほつれていたのか、耳の後ろに細い髪束が幾筋か、はらはらと落ちた。

「あら権大夫様、おぐしが」

陶子が気づいて言った。義弘も気づき、指でほつれた髪を撫でつけた。

「もとどりが崩れたのでしよう。手で撫でつけただけでは直りませんわ。わたくし結い直して差し上げます」

「いや、陶子殿を煩わづわすには及びませぬ。明朝命じて直させまするゆえ、そのままです」

「出がけではそれこそ煩わづわしいではありませんか。少しお待ち下さいね、直して差し上げますから」

言いながら陶子はもう立ち上がっていた。蝶の飛び立つように出て行ったと思うと、少しして手に櫛箱を携え、耳だらいを持った侍女を従えて戻って来た。櫛箱、耳だらいと脇に並べ、書見台の傍かたわらに立ててあった燭台を手元に持って来させた。

「さあ権大夫様、どうぞこちらへ」

手伝おうとした侍女を手を振って下がらせ、陶子は義弘を差し招いた。義弘は苦笑を浮かべ、しかし言われるがままに立って来て、

陶子に背を向け座った。長身の義弘の元結いを解くために、陶子は腰を浮かせ膝立ちになった。少しうつむき加減の逞しい首に、ほつれた髪が墨を刷いて散っている。漆黒の髪の下に、うなじが清らかに白い。傍らに据えた燭台の炎が、下顎から首筋にかけて霞んだ金色の隈どりを作っていた。紺色を纏った背は広く、間近に見ると眼前いっぱい迫るほどに思われた。

二つ折りに結い上げられた鬘に、陶子は手をかけた。結び目をさぐり、さぐりあてて爪先に力を込めほごいた。堅く巻き付いていた元結いは白く螺旋を描きながら難なく解け、支えを失った鬘はたちまち形を崩した。もとどりを押さえていた陶子の手から髪が水のように次々とこぼれ、軽い衣ずれを立てて肩に落ちた。

陶子は膝元の櫛箱に手を伸べた。櫛箱は銀朱の漆塗で、ふたに二匹の胡蝶の舞い遊ぶ姿が沈金で施されている。ふたを開け梳櫛を手にとった。中に収められた櫛笄の一式も、箱の意匠に倣い銀朱地に胡蝶の文様である。少女の陶子にはともかく、歴戦のもののおふである左京権大夫義弘の髪を梳くには、その可憐な櫛はいかにも不似合であつた。

肩ごしに櫛を伸べ、まず右の小髻に陶子は櫛の齒をあてた。髪の流れに沿いながら背の方へ梳き流すと、櫛齒は引掛りもなく髪の中を滑り、そのまま毛先からずりと抜けた。櫛から逃れて毛先が肩の上に一瞬躍り、布地を打ってかすかな音を立てた。

「権大夫様。権大夫様に見ただいて、わたくし少しはお歌が上達したでしょうか」

次にこめかみの辺りに櫛をあてながら、陶子が訊いた。

「上達致しましたよ。わたしの如き未熟者が申しては少々おこがましゅうござるが、詞の選いじび方など目に見えて良くなられました。やはり探題殿、今川了俊殿のお血筋ですな」

「そうだとよろしいのですけれど」

「いや、陶子殿は自らに才がないと頑かたくなに信じておられるようだが、景色、情感を捕らえる良い目と、詞に対するみずみずしい感覚とを、陶子殿は持つておられます。いずれきつと、人々の心を揺り動かす歌を、陶子殿は詠まれますよ」

「ありがとうございます。そのお言葉を胸に刻んで、精進致しますわ。権大夫様は、京にはいつまでおいでになるの？」

「今のところは何とも申せませぬが。ただ、島津氏うじひら久が没したこと
で九州の状況も好転し、また探題殿のねばり強い経略が功を奏し、
宮方（九州の南朝勢力）も近頃目立った動きを見せてはおりませぬ。
陶子殿の大叔父殿を助けに、権大夫が九州へ馳せ参じる必要は当分
ありますまい」

「では、またお歌を見ていただけますね」

櫛を動かしながら、陶子は義弘の後頭部に向かって言った。一見
華やいだ口調であったが、背を向ける義弘を見つめる目にはふと、
口調とは裏腹の翳かげりがよぎった。

語るに合わせ、肩に垂れた義弘の髪が揺れた。照らす灯明の火が
髪のおもてをさざなみ立って流れ、結い跡のところ、光は強く屈
折して、輝いた。流水の清らかさと陶子は思った。髪のゆらめきを、

陶子は優しく掌に受けた。黒髪は既に夜気を含んでずしりと冷たい。陶子はたゆたう潮を思った。堺の津より出で、潮流は雄々しくうねって内海を西へと進む。潮はやがて鮮やかな瑠璃色に変わり、源平の世に平清盛入道より篤い信仰を受けた厳島の礪を洗い、そして周防の岸へと流れ着いてようやく身を休める。その、蒼い潮の満ちる周防国が、義弘の領国なのだった。

くしけずられる黒髪の中に、陶子は義弘の故郷の地を夢想した。量豊かな髪に、銀朱の櫛は時折、吞まれてしまいそうになる。揺れる髪しやうじやうの布地をかすめる音、嵯峨野を覆い降り続く五月雨の音、蕭々たる雨声に追いやられて地上の音は悉く息をひそめ、静けさばかりがますます部屋に立ち込める。小倉山を越えてまた再び、雨音が強まって歩み寄せて来た。

(三)

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

陶子が母と暮らす屋敷は、小倉山と愛宕山に抱かれた北嵯峨の地、起伏のどかな田畑と、おちこちに点在する叢林そうりんの緑と、季節を映して折々にその彩りを変ずる山並みに囲まれた田園地の一隅にあった。敷地の程近くには、嵯峨さが天皇を開基とし、のちには後宇多上皇が院政を行われたという大覚寺の寺院があり、静かな夕刻には葉叢はむつのざわめきと共に修行僧の読経が聞こえた。

屋敷は、父である今川泰範が、陶子の母と過ごす別邸として建てたものであった。かねてより嵯峨野の穏やかな景観を慕っていた父は、陶子の母を側室に迎えたのを機に、日々の繁忙を忘れて若い側室と静かな時を過ごしたいと、わざわざ北嵯峨に屋敷を建てそこに陶子の母を住ませたのだった。母は内大臣三条公秀きんひでに連なる家の出で、実家は室町の大路沿いに屋敷があった。そのように華やかな場所で育った母が、景勝地とは言うもののその片方には草深さ、物寂しさの匂いの強い北嵯峨の地によく移る気になったものだが、もとも物静かなことを好む母は、屋敷周りの侘わびしさを取り立てて厭う風でもなかった。二年後に陶子が生まれ、陶子はそのままこの嵯峨邸で母の手で養育された。母と、時々通ってくる父に、歌を習い、管弦や舞を習い、そうして何思わらずらうこともなく、嵯峨野の田園風景にひっそりと守られて十何年を暮らして来た、陶子であった。

その静かな暮らしの中に、急に客人が訪れることとなったのは、ちょうどふた月前であった。その客人が、大内左京権大夫義弘であった。

「権大夫殿が昨年春、御所様に従い上洛を果たされたのは存じておるう」

陶子と母を前に、近頃めつきり白くなつて来た髭を撫でつつ、父はそう語った。

「昨年は入京したばかりのことで慌ただしく、ゆるりと愉しめぬままに花の季節を終えられたことを権大夫殿は残念がつておられてな。今年こそは思う存分に京の春を愉しみたいと申されるゆえ、それならば、花の終わるまでふた月ばかり、この屋敷で季節を愛でられてはとお招き致したのじゃ。申すまでもなく、周防大内家は我が叔父了俊の九州経略における盟友じゃ。また権大夫殿御自身も仲秋殿（了俊の弟）の息女を妻に迎えておられ、今川家とは縁が深い。心を尽くしたもてなしをしたいと思いますと思つてな」

父の話に、屋敷が常に静穏であることを好む母は少し気乗りしない様子を見せたが、陶子の方は逆に、子供のように胸を躍らせた。今しがた言つたように、母が静かを通り越して寂しいことを好むため、父が通つて来る他には、屋敷には親類縁者さえ訪れることがまれなのである。見ず知らずの人が長きに渡つて屋敷に泊まり込むなど、陶子が生まれて以来初めてのことであった。

「父上、左京権大夫様とは、どのような方ですの」

客人の来訪を待ちきれず、陶子はわざわざ父にそう訊いた。と言つて、陶子とても、左京権大夫義弘という人物について知らないわけではなかった。大内家は古くから在庁官人として周防に勢力を張つて来た家であり、義弘の父弘世ひろよの代に長門を切り取り、のちに幕府に下つて守護となつた。幕命により九州探題として下向した陶子の大叔父、今川了俊を、父弘世と共に周防で迎えたのは、義弘十六

の年である。以来二十年、義弘は了俊の第一の盟友として、探題方を助け九州の南朝軍攻略に功をあげて来た。今回の上洛と幕政への参与はそれを評されてのことであつた。

また義弘は、周防という京より遠く離れた辺土へんどにありながら歌に優れ、その名声は上洛前から京に聞こえていた。特に連歌においては好士こうしであり、師である前関白二条良基よしもとからは、「近日人多しと言えど当道の数寄他に異なる」と賛辞を受け、後円融院ごえんゆうの勅宣ちよくせんで編まれた「新後拾遺和歌集」にも、その二条前関白の推薦で一首が収められたとは、陶子も聞いている。大叔父了俊もまた歌道において高名な人であつたから、この二人が三十以上も年齢が離れていながら非常に親しい深交を結ぶに至つたのには、政や婚姻上の拘わりのみならず、その歌の数寄ということにおいて肝胆相照らすものがあつたためと思われた。

しかし、陶子が今父に尋ねているのはそうした来歴などではなかつた。生まれてこの方京を離れたことのない陶子は、辺土の民と言えども、平家物語に語られる、木曾義仲の都での乱行が浮かんて来る。勿論、左京権大夫様はそのような方ではないとしても、京からひと月がかりで歩かねばたどり着けぬほどの、地の果ての国の人であるから、その御容姿はやはりみやこびとは異なり、例えば寺の門前に赤銅色の巨体をそびえさせる仁王像のような、恐ろしい、荒々しいものなのではあるまいか。そんな、怖いもの見たさの好奇心が、陶子の中にはあつたのだつた。

「ははは、左様か」

陶子話を聞いて父は愉しげに笑つた。

「うむ、膂力りよくと言ひ、その体軀たいくと言ひ、確かに権大夫殿は仁王の如

き仁じや。小さくてか細いそなたなどは、見ただけでひっくり返るやも知れぬぞ」

目を細めながら、父は陶子をそばに引き寄せまるで小さな子供にするようにこうべを撫でた。もうじき六十に手が届こうという父は、母が幾度小言を言っても、とうに娘盛りを迎えたはずの陶子を童女の如く扱うのをやめなかった。ただでさえ、父娘ほどに年が離れた父と母であつたから、四十を過ぎてもうけた陶子は、父にとって娘よりも孫に近い意識なのである。そして、陶子が年頃になつても心から稚い空想いとけなが抜けぬのには、父のこうした接し方が要因となつてゐるのは間違ひなかつた。ともかくも、父がそんなことを言つて陶子の空想に御墨付きを与えたものだから、陶子はすっかり、赤銅色の肌に両眼がこめかみまで裂けた客人が屋敷に来るものと思ひ込んで、日を送つた。

(四)

しかし、いざ客人の来訪が告げられ、期待に胸を膨らませて母と二人挨拶に上がった陶子の前に現れたのは、仁王でも何でもなかった。成程父の言ったとおり、客人は鴨居かもいに頭がつくほどに背丈が高く、体つきも逞たくましかったが、赤銅色であるべき肌は白く、恐ろしくあるべき両眼は穏やかであった。陶子はここに至ってようやく、仁王云々という父の言は、娘の子供っぽい思い込みに乗っかってからかった戯言おれごとであったと気づき、顔から火が出そうになった。目の前の澄んだように黒いまなざしを見るにつけ、ありもしない異形の客人を期待していたことが今にも看破かんぱされるのではと思われてならず、ひと通りの挨拶を済ませると、陶子は、あとは左京権大夫という人の顔をろくに見もせず、そそくさと自室に逃げ戻ったのだった。

陶子が改めて義弘の元を訪れたのは、それから二日が過ぎた日の午後であった。春の日射しはまだ冷たく、粉をまぶしたような晴空を渡って遠くの山並みから吹く風も肌寒かったが、義弘は寒さが気にならぬのか、部屋の杉障子をいっばいに開け放って風を入れた中で、褐色の衣を纏まとった背をこちらへ向けひとり文机に座っていた。広く、清寧せいねいな、巖いわおのような後ろ姿であった。

「あ、の、もし、よろしいでしょうか」

そつと声をかけると、義弘はくるりと振り返った。部屋を覗き込んでいる陶子の姿を捕えた目が、たちまち微笑した。巖の清寧が解け、精悍せいかんな躍動が息づいた。

「これは、上総介殿の御息女にございますな。どうぞ、構いませんよ」

「でも、御用事の最中だったのではありませんか」

と言いながらも、そのくせ陶子は少女らしい遠慮のなさでもう部屋にさらりと上がり込み、義弘と向かい合わせに座っていた。

「何、ただの覚書の類にござる。折角、いにしえより貴き人々の愛でられた嵯峨野の地に逗留致すのですから、心に止まったくさぐさを、折に触れ書き留めておこうと思ひまして」

義弘は答えた。二日前の自分との体面については何事が記してあるのだろうか、何故ということもなく陶子はそんなことがふと気にかかった。

少々失礼と断って、義弘は文机の上に広げた手控えや硯箱を片づけ始めた。机の方へ半ば向き直りかけた肩こしに、義弘の横顔が見えている。おかげで陶子は、この間は狼狽するあまりよく見ることの出来なかったその容姿を、そつと観察する機会を得た。

真つ先に目を捕えるのは、したたるばかりにつややかな黒髪と、清らかに白い肌であった。見ればうつむいたこめかみに一筋、細い後れ毛が落ちて、白磁に焼きつけられた色絵の鮮やかさである。すつきりと切れ上がったひとえまぶたを縁取る濃い眉は明るく秀で、その間に浮かぶ眉間は磨き上げた新月を思わせた。小鼻を深く刻んで盛り上がった鼻梁や強く張った顎の線などには、やはりもののふらしいいかつさも窺えたが、それとて陶子の目には荒々しさよりも表情に豊かな陰影を与える一要素に映った。これほどに涼やかな面立ちの方は、洛中を歩いてさえ、そうはいないと思った。が、しかし陶子は、その涼しい美貌の内に、何か異質の匂いもまた、同時に嗅ぎ取っていた。それは都の人々にはない、火のような、鋼のよう

な、息づまるほどに張りつめた匂いであつた。陶子はいくさというものを肌で経験したことはなかったが、これこそがいくさの匂いではないかと思ひあたつた。その想念は胸の奥でかすかな疼きとなり、陶子は少し当惑した。

「嵯峨野は、如何でございますか」

あまり黙つていてはと、陶子あたりさわりのないことを尋ねた。

「美しゅうございますな」

義弘は言下に答えた。

「実は嵯峨野はこれまでも二度ばかり訪れておりますが、この、北嵯峨の方へ参つたのは初めてです。上総介殿がぜひにと申されるだけのことはある。まことに美しい土地です。殊に曇つた日の美しさには目を奪われます」

「曇りの日でございますか。今日のようなよく晴れた日ではなく」

「曇り日です。雲が灰色に垂れ込めた下に、草木が輝くことをやめ彩りばかりを鮮やかに滲ませ横たわつて行く様には、清冽な寂寥せいれつがございます。眺めておりますと、この地を愛でたいにしえびとの胸が伝わって参る心地が致します」

素直な口吻と美しい言葉は、聞いていて好もしかった。とりわけ義弘が嵯峨野の地を評してさりげなく言つた、清冽な寂寥という言葉は、快い痛みのようになって強く陶子の心中に触れた。

(五)

「さて、失礼致した。何の御用でしたか」

ようやく片づけものを終え、義弘が改めて陶子の方に向き直り、にこやかに訊いた。

「はい、実はお頼みしたいことがあつて参りましたの」

頼みとは、それは義弘に歌を見てもらいたいということであつた。既に述べたように、陶子の大叔父、今川了俊は歌人として高名な人であつた。それも京を代表する歌人であるのみではない。了俊は歌の点者（歌に評点を加える人）であり、歌論や指導書の著述者であり、歌会の呼びかけ人であり、つまりは京の歌壇全体を指導し、牽引する立場の人だつた。京歌壇から活気が失われて久しいとはしきりに囁かれていることだが、それは、この頃冷泉為秀や近衛道嗣とれいぜいためひで このえみちつぐいった有力の歌人が相次いで没したのに加え、九州下向によつて歌壇が了俊を失つた、その痛手が未だに尾を引いているせいでもあつた。

そういう人を大叔父に持っているのだという自負は、陶子にもあるのである。歌壇を牽引するような、とまでは思わないけれど、せめて今川了俊の名に恥じぬ歌を詠みたいと、密かな気負いを抱いている陶子であつた。義弘が屋敷を訪れることになった時、歌人として名を馳せている権大夫様に歌を見ていただいたらもしや、上達によすがになりはしないかとの思いが、仁王の如き容姿云々の話とはまた別な流れで、陶子の中にはずっと焦点を結んだのだった。

「成程、歌の指導を」

陶子の話を聞いて、しかし義弘は承諾に少し躊躇を見せた。

「急なお話で、ぶしつけとは存じますけれど」

「いや、左様なことはありません。ただわたし自身、未だ未熟の身ゆえ、人の歌におこがましく評を加えるのはいささか」

「でも、権大夫様は前関白様や、師成親王様からもたいそうな褒詞をいただいた、巧者ではございませんか」

「また、流派のこともございます。わたしは二条派の師に就きました。陶子殿は上総介殿より手ほどきを受けられたわけですから当然、冷泉派でございましょう」

義弘の言ったのはこういうことである。京の歌壇には三派があり、すなわち二条派、京極派、冷泉派がそれであった。二条派は、古今集、後撰和歌集、拾遺集の、いわゆる三代集の古典的形式の墨守を旨とし、他方京極派と冷泉派は伝統的形式を離れ、繊細な詞で「心のまま」を歌い上げるといふ歌風の違いがある。またその勢力図については、二条派と京極派は京において、各々持統院統と大覚寺統と結びついて覇を競い、一つ冷泉派は、二派の力の及ばぬ東国においてもつぱら勢力を張った。

周防山口では、義弘の父弘世が上洛の折に京より二条派の歌人を多く国元に招き、ために二条派の作歌が盛んであった。そして陶子の方は、陶子自身は京の生まれであるが、今川家がもとと本領が駿河であるから、その父から手ほどきを受けた陶子は自然と、冷泉派の歌風に最も親しんでいた。

「お話はもつともですわ。けれどそこを曲げて、ご助言いただきましたのです。わたくし、風情のとらえ方にしても、詞の続け方にしても、筆が迷うばかりで。学ぶほど、海の上に取り残されたように、何処へ進むべきか分からなくなつて。権大夫様はお歌に高名な方でいらつしやいます。ご指導いただけたら、上達のいとくちになると思いますの」

「そうですか」

「いえ、勿論、ご迷惑でしたら無理にとは申しませんけれど……」

そう言われて無下に断られる人はいない道理で、義弘は、承知致したとようやく白い歯を見せて頷いた。

「ではもろもろのことはひとまず置いて、見て差し上げましょう。書き置いたものなど、いつでも持参していただければ。ところで」

と、そこまで言つて、義弘は急に相好を崩し、陶子に悪戯つぱく笑いかけた。

「陶子殿、周防より上つて参つた男が、仁王ではなくてさぞ落胆致したではありませんか」

「えっ」

陶子が文字どおり飛び上がつて驚いたのを見て、義弘はからりと笑つた。

「父ですね」

やつと事態を察して、陶子は言った。

「こちらへ参った晩の、酒の席にて」

陶子は、義弘が何も知らないと思って、今の今まで平然と顔を合わせていたのであったが、実は義弘の方では、陶子にまつわる笑いをとうに聞き知っていたのである。陶子は、知らないうちに一糸も纏わぬ裸形（裸形）を見られていたような気持ちがして、恥ずかしさに全身が火照った。

「あの、でもあれば、あれは父の方がそのように申したのですもの。左京権大夫と申すお方は仁王の如き大兵であるから、わたくしなどは見ただけでひっくり返ると」

その場にいないのを幸い、陶子はい、自分の子供じみた空想を棚に上げ父の上に恥を背負わせた。可笑（おか）しそうに笑っていた義弘の目が、ふと優しく緩んだ。

「分かりました。では悪いのは全て上総介殿ということでは」

と、このようなことはあったが、陶子は翌日からほとんど毎日のように短冊を携え義弘の部屋に通った。

(六)

「陶子殿の歌は、詞を丁寧しんねいに選ぶだけです」と良くなります」

短冊を見て義弘はそう言った。

「その景色、風情を詠み表わすに最もふさわしい歌詞を、これという一語に行き着くまで飽かずに幾たびも熟考することです。が、同時に、言葉自体に引きずられて風情を見失わぬようにも心がけねばなりません」

作歌において、心風情はそのままにして歌語に推敲かじを加え、極められた唯一の詞を選ぶという、「替言かえこと」と呼ばれる技術である。これを提言したのは歌人の冷泉為秀なのだが、これは冷泉派の人物であつた。陶子が意外そうな顔をする

「わたしは必ずしも二条派の歌論の如く、三代集の歌言うたことからはずれてはならぬとは、思いませぬ」

陶子が歌の添削を申し出た時には二条派の冷泉派のと言つた義弘であつたのに、そのような、二条派の歌風を半ば否定するようなことを言つて、陶子を驚かせた。

「古今の歌仙が用いておらぬ歌言を用いても差しつかえないと思ひますが、しかし、あまりに奔放な詞は慎むべきです。例えば『春雨』という語があるからと申して『夏雨』などと勝手な言い換えをしてはならぬとは、これはわたしが連歌を学んだ折に言われたことです。が、歌においても変わりありません。自儘じままに造つた語は耳新かえしく、それゆえ鮮やかな印象を与えますが、却かえつて歌全体の趣を損な

うあやうさもありますれば。耳立たぬ、なだらかな、聞きよい詞を用いるよう心がけることです。先程わたしはあのように申しましたが、しかし三代集には折に触れ立ち戻るべきですよ」

「難しゅうございますね」

文机に硯箱や短冊を並べた上で、陶子は眉間にしわを寄せた。義弘はその傍らで、文机は陶子に占拠されてしまっているの、膝の上に手控えを広げ何事か書きつけていたが、しきりと頭をひねっている陶子にくすりと笑いかけた。

「探題殿もよく、そうやって頭から湯気を立てて考え込んでおられますよ」

「まあ、大叔父様が、でございますか」

陶子は思わず目を見張った。大叔父様、大叔父様と如何にも親しげに語ってはいるが、実のところその大叔父は、陶子が生まれる前に九州に下向しているため、陶子は一度も会ったことはないのだ。歌人として、または幕府要人としての功績ということならば、父を始め周りの大人たちからあれこれと聞かされたが、その人となりを窺わせるような血の通った話はいざ聞く機会がなかった。義弘のもたらした意外な人間像に、陶子は双眸そつぼうに光の射し込んだような強い印象を受けた。

「わたくしのように歌詞に悩みわずらうことなどないと思うておりました」

「いや、作歌の際は常に、臭いものにふたをしたような心を抱くと、探題殿は申しておられます。つまり詞において妥協があったという

自省^{じせい}が、いつも残るのですな。そのためか、以前に詠んだものを再び取り出し、直しを加えては思い悩^{おも}まれることもしばしばです。探題殿には、作歌とはすなわち懊惱^{おうのう}にございまするな。ですから、今陶子殿は詞を捕えられずに苦しんでおられますが、それはいわば、歌人として逃れることの出来ぬさだめであって、決して陶子殿の未熟を示すものではありません」

と、陶子を励ましておいて、義弘は話を継いだ。

「歌は、しょせんは芸能に過ぎません。が、探題殿はその芸能に過ぎぬ歌道の内に、人としての道を探っておられます。名誉のためでなく、ましてや遊興のためでなく、ただ己が求道のための作歌にござる。しかもいつ命が消し飛ぶかも分からぬいくさ場で求めて行くつというのですから、あのお心ばえには頭が下がる思いが致します」

「まことに、お歌に厳しい方でいらっしゃいますのね、大叔父様という方は」

感嘆と不安のないまぜになった表情を、陶子は浮かべた。了俊の名に恥じぬ作歌を、と気負ったとて、果たしてそこまでの苦悩と求道を課す勇気が自分にあるものだろうか。

「しかしその、歌に関しては自らに厳しいはずの探題殿が、酒に関しては自制が効かぬのですから、分からぬものです」

陶子の目によぎった不安の色を察してか、義弘は、今度は一転してそのような話を始め、陶子はまた驚いた。

「自制が効かぬとは、まさか酔って狼藉なさったりするのですか」

「量をひかえるということが出来にならぬのです。お年がお年にござりまするゆえ、あまり過ごされてはと周りが案じておるのでござるが、一旦ひかえられても翌日からまたずるずると。幸い酔われでも狼藉ということはございませぬ。まあどのみちあの御老体が、たとえ抜き身をかざして暴れたとて、たかが知れておりまするが」

一見穏やかながらその実、身もふたもない義弘の物言いに、陶子はどうとう、声を立てて笑ってしまった。しかしその突き放したように無遠慮な悪口の中に、陶子は、義弘と大叔父との間に結ばれて来た交わりの親密さを垣間見る思いがした。

「権大夫様も、大叔父様のような方ですか」

ふと陶子は訊いた。

「酒のことにございまするか」

「あら。いいえ、お歌のことです」

「いや、わたしは探題殿とは違います」

こうべを振って、義弘は否定した。

「探題殿はいわば、探題であるよりも武将であるよりも、まず先に歌人であるのだと、左様にわたしは思います。無論、擲やゆ掬くで申しておるではありません。しかしわたし自身はと申せば、これは何よりも先に、武人にござる。大内左京権大夫という男は如何に生きるべきであるのか、それをかえりみた時、精神の内に柱を成しておるのは武人としての己にござる。それゆえ、わたしも歌に心を

砕いてはおりますが、しかし最後に求めるのはもののふの道であり、そしてその道はやはり、いくさ場の、敵の刃の下にあるのだと、左様に思っております」

その一瞬、義弘の瞳の中に光がひるがえった。それは、血のたぎりとも呼ぶべきものかもしれない。陶子は、周防、長門から九州のいくさ場を、血と砂塵を従えて駆け巡って来た義弘の人生を思った。胸を衝かれる思いがして、陶子はいつまでもその瞳を忘れかねた。

(七)

* * * *

母は陶子が義弘の部屋を訪れては長く戻らぬことに、快い顔をしなかった。幕府の要人として室町の御所へしばしば出仕しなければならず、またおちこちの屋敷で開かれる歌会、連歌会に招かれて出かける夜も多く、権大夫様はそういうお忙しい身であるのだから、邪魔してはならぬというのが理由であつた。

「あなたの相手ばかりしておられぬ方なのですよ」

「遊びに参っているではありませんせぬ。歌を見ていただいているのです」

しかし陶子はいつにない頑^{かたく}なさでそう言い張つて、母の言に従うとはしなかった。母も歌を楯にされては、今川の歌道に重きを置く家風を知っているだけに、渋々ながら娘の行動を容認せざるを得なかった。

多忙の義弘ではあつたが、しかしその多忙の合間に、陶子たちと共に遊びに出たことも幾度かあつた。ある時は、父の提案で皆で大堰川^{おおい}に出かけ、舟遊びを愉しんだ。大堰川は愛宕山^{あいかたけ}の北方、佐々里^{ささり}峠を源に京を南下する桂川の下流部で、大堰川と名を変え嵐山の裾を巡る頃には川幅は広がり流れも緩やかになる。五百年の昔、この穏やかな水流に船を浮かべ詩歌や管弦を愉しんだ宇多上皇^{うたみか}に倣い、川面に船を遊ばせ船上で酒を酌みつつ歌を詠もうというのが、父の趣向であつた。

広い川面は雪解け水も収まり、春光を流しながら濃緑に静まっていた。川岸に迫る嵐山の勾配には山桜が咲き始めていた。山頂の方は未だ蕾であるのか山肌は葡萄色にくすみ、それが山裾に向かつて徐々に薄紅を帯びて下りて来る。水際に立つものの中には気ぜわしく満開に咲きほころんだ花枝もあり、白い花衣の光彩が舟でゆく者たちの瞳に射した。

華やかなにぎわいを乗せて舟は緩やかに進んだ。義弘と、父母と、陶子。それから義弘の従者、陶子の家の郎党、侍女。父と義弘とだけはさすがに筆を取りつつ景色に眺め入っていたが、あとの者たちはたまの遊興のこととて、男たちは酒に女たちは菓子と他愛ないおしゃべりに夢中になって、宇多上皇の催されたものとは随分様子の違った舟遊びとなっていた。陶子もまた、始めこそ父に倣って筆を握っていたものの、絵巻物を繰るように次々と現れる景色の美しさ、規則正しく舟を揺する波の愉しさにいつしか筆を投げ出し、舟べりに寄って身を乗り出した。銀の箔がそよよくな、優しく小さな川音が陶子を包んだ。日を追って温みを増す日射しを押しとどめるように、川風は冬の未練を残して肌に冷たい。風が渡るたび、川面には碎かれた陽光が群れ踊った。陶子は髪を耳に挟んで舟べりから水へ指を伸べた。白い桜の花びらが一ひら光の砂子の間を漂っている。舟底を柔らかにせり上げる波のたゆたいに阻まれて、花弁は陶子の指先から幾度も滑って逃れた。

「そのように身を乗り出してはなりませんよ」

義弘と父のそばで酌をしていた母がはらはらして声をかけた。気づいた周りの侍女たちが慌てて陶子の体を押さえた。

「川は、不思議ね」

母の声など気にも止めず、陶子は濡れた指先にやっと花弁を捕え、頬を上気させた。

「井戸底に溜まった水などは気味悪いのに、川は何もかもが澄み切って、面白く見える。本当に不思議」

「莫迦なことを言つて」

母が呆れたように咎めた。

「童のような真似をしてはしたない。それに川風にあたると冷えますよ。慎ましくしておりなさい」

陶子は笑つて、ようやく体を引いた。と、舐先へきの方から呵呵かかとした笑い声が起こった。見れば父と義弘である。いつの間にか見晴らしの良い舢先へ座を移し、何を語らっていたのか愉しげに笑い合っていた。父の声は川音に遮られて良く聞こえなかったが、義弘の声は川のさざめきを払って高く響いた。大木を一陣の風が吹き抜けるような、男性的な笑声に、陶子と母は思わず目を見合わせ、それから袖の陰で好ましい忍び笑いを洩らした。

「あのようなお客だと、屋敷が華やぎまする」

いつになく母がそんなことを言った。そして口元の笑みはそのままに、ほっとかすかなため息をついた。

「勿論旦那様が訪つて下さるのは嬉しいけれど、あのお年にございますから。どうしてもこちらが氣遣わねばならぬことの方が多くなりますもの。華やぐというわけにも……」

生まれてから今日まで父母が声を荒げ合つたことなどなかった。二人の間にはいつも安寧^{あんねい}と慈愛と微笑とが行き来していた。親類縁者が皆、口を揃えて仲睦まじさをうらやむ母の人生にも、その陰には母なりの寂しさというものがあるのかと、そんな思いが陶子の胸をふつとかすめたが、その時、舟は水の上に大きく張り出した花枝の下を過ぎた。川風が吹き、思わず目を奪われたふなびとたちの頭上に白い花びらがはらはらと散つた。女たちの口から鈴を振るような歓声が上がった。陶子の胸に一瞬^{きせき}兆した翳りも、散る花と共に川上へと吹き流された。

「ならば母上、これからはお屋敷にもつとお客人をお呼びなさいませ。父上も差しつかえないと申しておられますものを」

母に向かつて、役にも立たぬであろうそんな提案を言つたきり、陶子は母を置いて舢先の方へ寄つて行つた。控えていた侍女の手から瓶子^{へいし}を受け取つた。

「権大夫様、寒くはございませんか」

盃に酒をつぎながら、陶子は氣遣つた。陶子も含め舟の人は皆川風に備えて着込んでいるというのに、義弘ばかりは、多少厚手とはいえ帷^{かたびら}の上に単衣^{ひとえ}を着たきりなのである。しかし義弘は

「何、むしろ川風が心地良うござる」

と、快活に手を振つた。陶子に氣を遣わせまいと瘦せ我慢を張っているのではなく、肌で受けるにはまだ少し寒過ぎる風も、舟の底板を透して時折上つて来る水の冷たさも、實際苦にならぬようであった。義弘の横顔に川面から跳ね返つて陽の光が射している。真夏の刺すような陰影ではない、白く霞んだ柔らかな光の反射である。

それが、義弘の面輪によく合っていた。周防という暖かな地の陽を浴び、南の海風を浴びて生きて来た義弘の体には、凍てつく冬をものともせぬ陽光がみなぎっているのかもしれない。その、目には察せられぬ炎が、陶子には慕わしかった。

(八)

また別の時は、母の兄である権中納言より庭を見に来てくれるよう招かれ、皆で訪れた。権中納言の別邸は小倉山の山麓にあり、訪れた時はちょうど、庭は木瓜ボケの花が盛りとなっていた。

「そうか、権大夫殿は北嵯峨は初めてであつたか」

権中納言は上機嫌で言った。屋敷の周囲は生きものが絶えたように静かで、静寂の中に、曇天の空を背景に、白木瓜の、薄紅をほんのりばかりして枝一面に咲き乱れる様は、権中納言がわざわざ招くだけあつてあたかも無何有むかうの郷をそぞろ歩くような美しさである。庭を案内しながら、権中納言は周辺の見所をあれこれと義弘に講釈していたが、ふと思い出して、

「そうそう、手近なところだと、ここから少し上つた所に京極中納言の庵跡がありましたな」

と言つた。

「藤原定家卿の。嵯峨和歌集を編まれた山荘にござるな」

義弘は強く心惹かれたようだった。一通り庭を見、座敷で菓子などいただいたあと、義弘は足を伸ばしてその庵跡を訪れてみたいと言つた。

「わたくしお供致します」

陶子がすぐに腰を上げた。

「ああ、陶子はまだ訪^{おも}つたことがあらなんだか。うむ、あそこの寺は景色も大層よろしいから、良い折じゃ、権大夫殿に連れて行っていただきなさい」

と、伯父の快諾を得て、陶子は勇んで義弘と共に出かけた。定家が庵を結んだという二尊院へは、木々の間を通された林道に行く。林道と言っても、繁^{しげ}く往来のある参拝の人々のため、並んで歩けるだけの幅もあり、地面も下草を払って整えられていたが、義弘は林に入ると、後ろに従っていた従者に命じて、陶子の脇に付かせた。左右を義弘と従者に挟まれ、前には先達^{せんだう}の者、後ろにも家人が二人従っているため、陶子は自然と人垣に周りを囲まれて歩くような格好になった。

「厭。これではまるで引き立てられて行く罪人のようではありませんせんか」

「ところどころ、道が滑ります」

不満顔の陶子を、義弘はそう言ってなだめた。それから急ににやりと笑って、耳元に口を寄せ囁いた。

「探題殿に怪我でもされては、幕府の九州経営は立ちゆかぬのでござりまするぞ」

「まあ、それは」

たちまち顔を赤らめて、陶子はおとなしくなった。

「権大夫様、ひどうございます。お忘れ下さいと何度も頼んでおり

ますのに」

目じりをきつと張って、陶子は義弘をにらみつけた。が、まっげに囲まれた黒い瞳には照れ隠しの笑みが消し切れずに残っている。そこを目ざとく見つけ、義弘は悪戯いたずらな少年のように、声を殺して笑った。

「探題殿」とは、陶子と義弘の間の、ごくつまらない密事と繋つながった言葉なのだった。十、どころか二十近くも義弘と年が離れていることが、陶子には気に病まれてならなかった。出来るだけ大人びて美しく見えるよう、義弘の前では立居振舞い、言葉の端々、墨をすったり筆を取ったりといった些細ちさいな所作しよさくにまで、神経を碎くだいていた陶子であった。ある日、陶子は父のことづてを預り、義弘を部屋に訪ねた。

「父が酒でもと申しておりますが、如何でございますか」

陶子はことづてを伝えた。

「よろしゅうござるな。すぐ伺うとお伝え下され」

「承知致しました。では、西の棟に用意が出来てございますから、参られよ」

どうしたはずみか言葉が滑り、参りましようとか、お越し下さいとか言うべきところを、陶子は、参られよ、と、男言葉を使って言ってしまった。陶子は飛び上がった慌てた。せめて義弘は気づかずにいてくれたらと願ったが、それも虚しく、おや、という表情のあと義弘は弾けるように笑い出した。

「も、申し訳ございません。わたくし、その、とんだ失礼を……」

「いや、謝るほどのことではありませんよ」

しかしそう言いながらも義弘は相も変わらず可笑しそうに大笑するばかりで、とうとう恥ずかしさにいたたまれなくなって、陶子は顔を覆って部屋を出て行こうとした。

「お待ち下され」

義弘が袖を捕え、笑いながら陶子を押しとどめた。

(九)

「お気を悪くなさらずに。今しがたの陶子殿の口振りが探題殿とあまりに似ておられたもので」

「大叔父様と」

「何と申しますか、こちらの身が自然と引き締まるような物言いが、ちょうど出陣を控えられた探題殿に似てござった。声音も容姿もまるで違っておふたりであるのにと、つい可笑しゅうなつたのでござる。このとおり、何卒なにとぞご容赦下され」

そう言つて義弘は大真面目に両の拳を床につけ、主にでも詫びるように陶子に向かつて深々とこうべを垂れた。義弘の前で失態を演じてしまったやりきれなさはまだ胸につかえていたが、その飄ひょうげた仕種に陶子は思わず吹き出して、そして笑つてみると失態も何となくすすがれたような気持ちがした。

「収めましょう。おもてをお上げなさい」

陶子も負けじと、平伏する義弘の頭に鷹揚おつように答えた。二人の笑い声が風のように部屋を吹き抜けた。

「あの、権大夫様。先程のわたくしの非礼、誰にも言わないで下さいませんか」

ひとしきり笑い合つたあと、陶子は義弘のそばへ寄つて声をひそめた。

「非礼とは、参られよ、のことにござりまするか」

と、義弘はにやにやしなからその言葉をわざわざ繰り返し、しかしすぐに頷いた。

「承知致した。口外は致しませぬ」

「それと権大夫様も、お願いですから忘れて下さいませ」

「それも承知致しました」

きつとですよ、と、しっかりと口止めた陶子であったが、しかし内心では、義弘も多くの人と同様、年若い陶子との口約束など守りはするまいと思っていた。家を揺るがすような大事ならばともかく、陶子のは取るに足らない失敗談に過ぎないのである。陶子の口振りが大叔父の了俊に似ていたとは、酒の席で披露するに格好の笑い話であるし、以前父が、周防からの客人に仁王像を期待していた陶子の逸話を酒の肴にしたように、義弘もまた今から酒の膳についた途端、たちまち禁を破って皆に面白可笑しく語って聞かせるのだらうと、陶子は部屋を下がりながら肩を落とした。

次の日、陶子は立居振舞いの躰には厳しい母に呼び出されるものと身構えていたが、その日が過ぎ、翌々日が過ぎててもその気配は一向になかった。数日の間平穩をいぶかしんだのち、陶子は父母にそれとなく尋ねてみた。が、二人ともまるきりの外れなことを言うばかりで、事情を知らながら恩情を持って不問に伏してくれているというのではなく、本当に何も知らないようだった。陶子は初めて、自分とのつまらない約束を義弘が守ってくれたと知った。

『ああ、権大夫様という方は』

そういうお方なのかと、陶子は嬉しさに胸を震わせた。翌日陶子は侍女を連れて近くの野に出かけた。おだまきや山吹といった野花を腕いっぱい摘んで戻り、大きな花生けに手ずから生けた。経机に乗せ、侍女二人に義弘の部屋まで運ばせた。

「これは、見事にござるな」

部屋に運び込まれて来た、こぼれるばかりに花の咲き乱れた花生けに、義弘は書見台から上げた目を見張った。

「近くの野で摘みましたの。権大夫様に、お礼のしるしですわ」

「礼？ 何の礼ですか」

「それは、内緒」

陶子は袖で口元を隠し、愉しくてたまらぬようにくっくつと笑った。

「では何の礼かは捨て置いて、素直に受け取りましょう」

捕らえどころのない少女の心を、義弘は恐れもせず、抗しもせずそのままに受け止め、微笑した。手をしばし花叢はなむらに遊ばせ、それから礼にと言って春の野辺を歌に詠み、陶子にくれた。

件の一件を口外せぬとの約束を守ってくれた義弘であつたが、義弘自身も忘れてくれるようにというもう一つの約束の方は、しかし義弘は結局、守らなかつた。それから、義弘は何かといつては陶子を「探題殿」と呼んだり、また二人きりの時は陶子に対し僕のよ

うに慇懃にかしこまって見せたりしては、面白がった。そのたび、陶子は大仰に眉をそばだて、目をいっぱいに見張って怒った表情をつくろ。まず義弘が笑い、それから陶子が笑う。ひとしきり笑い合つて、そこでやりとりは終わるのだった。それは陶子と義弘が共有した、ささやかな、しかし二人だけの秘め事であり、一連のやりとりは二人にしか理解し得ぬ秘密の言語であつた。怒つたり、たしなめたりしながら、そのくせ陶子は、義弘との間にその密やかな会話の始まるのを、いつも心待ちにしていた。

(十)

行くうちに、林道の両脇には花をつけたツツジの灌木^{かんぼく}が現われ始めた。緋色に染め上げた花弁は枝葉も見えぬほどに咲き乱れ、頭上^{かみうへ}に喬木^{けうぼく}の梢^{えだ}がさやさやと鳴る木の下陰^{このしたかげ}に小指で紅を差して行くようだった。陶子が幼い頃、父は野にツツジが咲くと花をむしっては、腕に抱いた陶子の小さな口に蜜を吸わせた。ある時花も食べられるのだと教えてくれて、試しに噛んでみたが苦いばかりで美味しいとは思われなかった。幼い折の思い出が蘇って、陶子は脇を歩く従者に頼んで、緋の花をいっぱいにつけた枝を折り取ってもらった。花を一つむしって、

「権大夫様、如何でございますか」

と、すまして義弘に差し出した。

「一体何事ですか」

などとは、義弘は問い返さなかった。指の間に花を受け取り、慣れた仕種ですうつと蜜を吸い、陶子に向けた目を笑わせた。陶子も義弘を見上げ、くすりと笑った。義弘は背が高い。父や、おじや、従兄弟たちや、これまで陶子の周りにいた男の人のその誰よりも義弘は上背がある。その長身の義弘の顔を首を反らせるようにして高々と仰ぐのは、何か恥ずかしいような嬉しさであった。義弘を見上げたまま、陶子は唇の間に花をくわえすうつと蜜を吸った。吸い終えた花殻を足元に捨てた。二人は代わる代わる花をむしっては吸い、吸っては捨てた。花は人々の行き過ぎた地面に、去る者を追うかのよう、点々と紅を残した。

花がすっかりなくなる頃、二尊院に着いた。門前を掃いていた寺男に訪れた理由を告げると、寺男は門内に入って行きやがて入れ替わりに若い僧が顔を出して、境内を案内してくれた。砂利を敷いた参道を抜け唐門をくぐると本堂がある。本道の脇からは細い石段がまっすぐ山に向かって伸びており、石段をたどって二条家、嵯峨家といった公家の人々の墓所を抜け、法然上人の墓も行き過ぎて登りつめた先が、定家の庵、時雨亭であった。

建物自体はとうの昔に取り壊され、灌木や雑草も茂って庵跡と言ってもそこは既に薄暗い荒地となっていたが、しかし注意深く見ると柱の礎石らしきものが、地に埋もれかけて残っていた。石は四角を作って規則正しく並んでおり、目でたどるとかつての屋敷の有様が彷彿ほうふつとするようであった。

「ここで、和歌集を編まれたのですね」

陶子が感心して言った。

「和歌集は、万葉から新古今まででございましたね。そのような長きに渡る内から、わずかに百首を選ぶのは、大変なご苦労でしたでしょうね」

木々の間にひっそりと横たわる屋敷の残骸を、陶子と義弘は感慨深く眺めていた。俊成としなり、定家父子の輩出で、定家の御子左家みでこひたりは歌道の名家として確立を見たのだった。そして下って定家の孫の代に、家は二条家、京極家、冷泉家の三家に分家し、それと共に京歌壇もまた、二条派、京極派、冷泉派の三派に分かれたのだった。つまり二条派の義弘にとっても、冷泉派の陶子にとっても、藤原定家は歌の祖であり、仰ぎ見るべき歌仙なのだった。庵跡を拝むというのもおかしな話だが、陶子は歌の上達を願って胸の前に手を合わせた。

時雨亭からは、小倉山の傾斜を覆う葉叢はむらごしに嵯峨野の一带がのぞまれた。点在する寺院をそれぞれに囲んでこんもりと茂る林、田畑、荒れ野、遠くにはなだらかな傾斜を見せて衣笠山の稜線が長く横たわり、蒼みがかった薄鼠色の空の下、緑色の陰影が美しかった。眺めるうち、遠くの樹林の陰から大きな鳥が一羽飛び立った。長い翼の影はトビでもあろうか、梢の密生した上をしばらく舞い、やがて両翼を大きく打ちつけて高く飛翔した。羽をまっすぐに張り、音のない空を紙の吹き流れるように斜めに横切った。見つめる陶子の胸にふと、清冽せいれつな寂寥という、義弘が北嵯峨について語った言葉が迫った。

陶子は、感に堪えた。眼下の景色はまさにその、清冽な寂寥そのものであった。この静寂を詠みたいと、陶子は咄嗟に願ったが、思いに反して詞はことは出て来なかった。冷泉派の歌風は、心に浮かんだ情感を心のままに詠み表わすことにあるのだが、しかし今陶子の中に湧き立つ情感はいたずらに胸を責めるばかりで、口の端にのぼそうとすればするほど、波となって詞を砕き去るばかりだった。

「ならばその情は詠まずにおきなされ」

義弘が言った。

「沸き起こる情感に背を押されるままほとばしる歌もござる。しかしまた、情感を幾日、時には幾年も心の底に沈めるうち、雑味が取り除かれて澄み、または新たな雑味が加わりもして、しかるのちにようやく一首に結晶する歌もござる」

「幾年も沈めておいては、権大夫様はそれこそお国に帰ってしまわれす」

「そうなたら山口に送って下さればよい。探題殿の使いとして連歌僧などがたまさか、下向しておるのは存じておられますな。あの者たちの手に託して下されば、間違いなくわたしの元に届きまするゆえ」

義弘は事もなげに言った。陶子はじつと義弘を見上げ、それから黙って頷いた。義弘の傍らを離れ二、三步、崖ぎわに歩み寄った。左手の遠方にあだし野の森が見える。かつては風葬の地で、野辺には数限りない屍がうろく横たわっていたと言うが、空海上人の手で埋葬が行われ、先程墓所を通って来た法然上人が念仏寺を開いた今は、その記憶は緑濃い森の奥に眠ってしまったようであった。緑の間から一筋の煙が昇っていた。野辺送りの煙と思われた。嵯峨野に風はなく、雲の垂れ込めた空へ向かって、煙は吹き流されることなくどこまでも昇った。

(十一)

* * * *

五月雨の音が部屋に立ち込めている。音調も抑揚もないまま静けさだけを奏でて、陶子の白い手と、櫛と、櫛歯を噛む黒髪とを包んでいる。陶子は耳だらいに水櫛を浸した。湿した櫛で撫でつけると髪は露を含んで、灯火の光が幾千の金糸となって流れた。地を覆って降り込める雨脚が、髪のおもてに束の間、現出したかのようにだった。

水櫛を置いて、再び梳櫛すきくしを手にとった。前髪を撫でつけ、小髻こびん、こめかみ、首筋と櫛をあて、順ぐりに頭頂へ梳き上げては手の中に束ねて行く。髪を搔いて奔放に滑る櫛のあとに、光の糸は影となつて従順につき従った。濡れた髪が、指の間に清流のような感触を残した。

髪を一束、陶子は指先に絡めてみた。柳の若枝のようにしなやかな、弓弦のように力強い張りを持った、若々しい髪だった。いくさ場に馬を駆る血の高揚が黒髪の一筋一筋に脈打つように思われた。指をゆるめると髪束はたちまち鞭のように身をしならせて逃れ、逃れるはずみに先端が、陶子の頬をかすめた。ひんやりと冷たく、しかし花のように優しい打擲くぎげりであった。揺れた髪の間には芳香が匂った。ほのかに甘く、甘い内に一点、涼しく冴えた香りを含んで、梅花を吹き抜ける寒風を思わせる匂いである。髪に刷はかれた香油の匂いに、陶子はそっと、頬を寄せた。陶子の仕種を知ってか知らずか、義弘は身じろぎもせず、無言で座っている。

陶子は、頬を引いた。あとは銀朱の塗り櫛の髪をたぐる柔らかな

音、髪と髪がすれ合うかそけき音、やがて髪はまとめ上がり、元どおり、二つ折りの鬘まげに形を収めた。もとどりを作法どおりに束ね、結び目を固く絞った。水櫛で後れ毛を撫でつけ、髪はすっかり整った。

「権大夫様、結えましたわ」

陶子は声をかけた。

「かたじけない、お手を煩わづわせ申した」

礼を述べて、義弘は肩ごしに陶子を振り仰いだ。こちらへ向けられた義弘の顔が、驚くほど間近かった。筆で描いたような流麗な眉の一筋一筋、目のふちにうつすらと射した血の色、いくさで受けたのか左頬に細く残る傷痕、このふた月ほとんど毎日のように目に留めながら、心には明確に留めていなかった、そうしたごくさやかな特徴がはつきりと映り、はっと胸を衝つかれて陶子は義弘の面輪おもわを固唾かたすを呑むようにして見つめた。こんな時、普段であればすぐに破顔はつがんし、戯言ぎげんなど言い出す義弘のはずであった。しかし今、義弘は笑わず、戯言も言わなかった。自分を見つめる陶子と対を成すかのように、陶子の面輪をじっと見つめ返した。

「陶子殿」

しばしの沈黙と仰視のあと、陶子の目を見つめたまま義弘は低く言った。

「櫛を下さい。今度はわたしが、陶子殿の髪を梳いて差し上げましよう」

「えっ」

ぶしつけとも思われる義弘の言葉に、陶子は驚き戸惑った。

下賤の女ならいざ知らず、身分ある女性にとって、髪さかの解け乱れた有様を人目に晒さらすことは考えられなかった。髪を梳かき整えているところを父親が見るのも好まれないというのに、ましてや客人に髪を梳かせるなど憤みある女性のすることではない。如何いかに周防が辺へ土んどと言つて、大内家は王朝の御世から国衙こくがを治めて来た名家である。その当主たる義弘がそれを知らぬはずはないのに、いきなりそのような無礼を申し出た、その意図をはかりかね、陶子は頬を赤らめ首を振った。

「おたわむれはいけません。権大夫様、わたくしを子供とお思ひになつて」

「違います。そうではない」

義弘は言下に陶子の言葉を否定したが、しかし、では何故なのかとは言おうとしない。陶子はますます困惑してひとりで別な言葉を探した。

「はしたないとわたくしが叱られます。もし誰かに見られたら……」

言いよどみながら陶子はうつむいた。義弘は陶子の方へにじり寄った。まだ膝立ちのままであるため、うつむいた陶子の目はちょうど、義弘の顔をまともに見下ろす格好になった。

「もう刻限は遅い。誰も参りませぬ。またたとえ参ったとしてもここには入れませぬ。案じ召さるな」

(十一)

陶子の目を覗き込み義弘は声をひそめた。何かいつもの義弘ではないようだった。確かに義弘には少し強引なところがあった。例えば酒の席で、女たちが怖がつて悲鳴を上げているところへ容赦もなく、いくさ場での血なまぐさい体験談を語って聞かせては面白がつたりしたが、けれどもそれは、あくまで瓢^{ひょう}げての上でのことであつた。今の義弘は、とてもそうとは見えなかった。ふざけているのではないのに、声音や物腰は普段どおりの穏やかで優しい義弘であるのに、陶子の困惑など齒^{しか}牙にもかけず髪を解くことを強いるなど、陶子には何もかもが解せなかった。言葉を失つて、陶子はただ義弘の瞳を覗き込むばかりであつた。吸い寄せられそうに黒く静まつた瞳が見つめ返していたが、その漆黒の中に何かを読み取るには陶子は若過ぎた。

陶子の戸惑いはそのままに、義弘は陶子の手を取つてその場に座らせた。長い腕が伸びて、体をすっぽりと抱きかかえるような格好で義弘は陶子の背に両腕をまわした。頬が迫つて額に体温が羽のよ^{ときいろ}うに触れた。雨音がいつとき、耳元に高くなり、そして遠のいた。ゆつくりと、義弘が体を離れた。手に鴉^{ときいろ}色の元結があつた。解かれた髪が、崩れ、背の上に広がつた。通り過ぎる五月雨にも似た、かすかなすれ音がした。

義弘が櫛箱を引き寄せた。梳櫛^{すきぐし}を取り、陶子の髪にあてた。頭頂に整えられた仄白い分け目を源泉に、黒髪は頬をふち取つて肩に落ち、そこからふくよかな湾曲を見せて背中の下りている。室内にはさほど明るいとも言えぬ灯明が一台据えてあるきりで、しかしつややかな髪はその薄明かりを充分過ぎるほど吸い、星雲のような仄かな光を一面に纏^{まと}つていた。

丸く削った櫛齒が地肌を心地良く搔いた。櫛は耳をかすめ肩に落ちて止まり、義弘はそこで櫛を手前にたぐった。背の上に流れていた髪が搔き寄せられ、胸元に落ちた。もう一度、櫛があてられた。櫛齒が地肌を搔き、耳の後ろを通って肩で止まり、そして新たな髪が胸に落ちた。

髪は頭頂より一途に流れ落ち、膝の上で柔らかくにうねってよどみを作っている。おもてには光がさなみ立ち、あたかも無音の世を流れる滝のようであった。黒色の流れに、義弘は手を浸した。掌に受け、すくい上げると、髪は広がって掌からこぼれ、義弘の腕をつたった。手首から肘に向かって肉が盛り上がり薄青く血脈が透いている、その逞しい腕に黒髪の藻草はしどけなく絡みつき、黒い血の流麗な線を彩った。黒髪の闇の下に、白い肌と青い血脈とが冴え冴えと映えた。

髪が腕をつたい落ちるのも構わず、義弘は掌に残った髪に櫛をあて、胸元へたぐり寄せるようにして毛先へ櫛を流した。髪は織り出された黒絹となって櫛に導かれ、そして櫛齒が抜けると共に、壊れた夜の闇のように、また胸の上になだれ落ちた。何もかも、義弘の為様は逆しまであつた。髪を梳くのならば義弘は陶子の背後に座るべきであつた。そしてそもそもその流れに逆らわぬよう、背中へ向かつて梳き流すべきであつた。そうであるべきなのに、しかし義弘は陶子と向き合わせに座り、胸の方へ梳き捨てながら、先程までは梳き直すまでもなく結び整っていた陶子の髪を櫛でもってわざわざ乱しているのだつた。その奇異を、しかし陶子は咎めるでもなかつた。義弘もまた詫びるでもなかつた。いつしか、陶子は両の肩から乱れ髪を黒衣のように纏い、しかしさみだれ髪に乱れてなお、陶子の髪は薄闇の中に美しかった。そして陶子と義弘の他には誰ひとりおらぬこの部屋に、二人の有様を見咎める目はなかつた。

義弘の手がふと伸びた。額の生えきわから目の上にほつれていた後れ毛を、そつと掻き上げた。耳に、くぐもったすれ音がした。磨いた瑪瑙めのうのような爪がこめかみに触れて、陶子のかすかに息を呑んだ。まつげが震えた。頬が汗ばみ、一瞬、香気が、陶子の肌から匂い立った。仄かに甘く、一点の涼しさを含んで、梅花を吹き抜ける寒風の匂い。義弘の髪に漂ったのと同じ、それは琥珀香の匂いであった。

(十三)

琥珀香というその甘美な名を、陶子は義弘に教わったのだった。

その日、例の如く義弘の部屋の間机を借り、陶子は晩春の吉野の景色を詠もうとしていた。やがて一首を作り上げ、陶子は歌の出来たことを傍らかたわの義弘に告げた。

「左様、ここは吉野山、ではなく、み吉野の、の方が、耳に柔らかくてよろしいかと」

背後から机の短冊を覗き込んでそう言いながら、いつもは短冊を手にとつて直しをするのであったが、義弘はその時何故か陶子の肩越しに添削の筆を伸べた。衣が触れ合い、体温がふわりと背にかぶさると共に、何かの馥気ふくきが漂つて、陶子は思わず、義弘の顔を仰いだ。

「香りが致しますわ」

つられてこちらを見下ろした義弘の黒いまなざしから、澄んだ香気が葉末はすえを転がる玉露となつてこぼれるような、そんな感じを抱きながら、陶子は言った。

「良い香り。伽羅きざいでしょうか」

「ああ、髪につけた香油でござろう。唐のものにて」

琥珀香、と、義弘はあまり耳慣れぬ名を言った。

「コハクとは、石の琥珀ですか」

不思議そうに陶子が尋ねた。琥珀は日本でも古くから香として薫か
れているが、義弘の言う琥珀香とは薫き物ではなく、琥珀から採
った香り高い油のことであった。

「でも、木や花ならともかく、石から香料が採れるのですか。絞る
というわけにはいかないでしょう」

「実はわたしも製法は存じぬのです。が、琥珀はそもそも木の脂が
固まったものにござれば、採れるのであります」

「世の中には不思議なものがあるのですね。ね、権大夫様、その琥
珀香というもの、わたくしにも少しつけていただけませんか」

「よろしいですよ」

義弘は白磁の小瓶を取り出して来た。水瓶すいびんに似た細口の瓶で、繊
細な形に唐の匂いが漂った。

「香油は練り香などよりもずっと香りが強うござる。つけ過ぎると
のちのち難儀致します」

などと注意を促しつつ、口を開け、陶子の手を取って掌に一滴、
たらした。馥郁ふいくたる香氣がたちまち、泉のように湧き上がった。陶
子の知っているどの花ともどの香木とも、その香りは異なっていた。
清らかに深く、例えようもなく高貴な香りだった。そしてその鮮や
かさ。わずかに吸い込んだだけで香氣が身の隅々までもを浸すよう
で、陶子は浄土に咲く幻の花を眼前に見る思いであった。香りの広
がった両の掌を陶子はすり合わせてみた。香油と言うものの肌触り
はむしろ水のようにさらりとして、そして肌の温みや汗と感応する

のか、手をこするにつれ、琥珀香の香りは雲のように種々に変化した。

「楽土に住まう天女の肌は、きっとこのような香りでございますわね」

陶子は目を閉じ、うっとりとした吐息を唇の間に洩らした。

「天女の肌とは、これは陶子殿も艶えんなことを申される」

「この世の憂さ辛さに穢けがされたことのない女性でございますもの。この香りはそういう者にふさわしゅうございますわ」

掌で頬を包みながら陶子は答えた。目を閉じ唇には三日月のような柔和な笑みを浮かべ、琥珀香の馥ふく氣に導かれて陶子自身が楽土の天女に変じたようであった。

「お気に召したのであれば、これは陶子殿に差し上げましょう」

口を元どおり固く閉め、義弘は陶子の手の小瓶を握らせた。高さは三寸ほどの、手に隠れそうに小振りのものながら、胴には一面、丹念な細工で唐花の浮き彫りが施され、乳白色の釉うわすじがしつとりと肌になじんだ。

「でも、珍しいものなのでございましょう？ いただいちゃってよろしいのですか」

「気になさらずに、お受け取り下さい。女の方が使うには、少々香りが堅いかもしれませぬが」

それが、四日前のことであつた。そしてその、義弘よりもらった琥珀香を、陶子は今夜ここへ来る前に密かにこめかみにすり込んで来たのだった。指を上げ、義弘は再び、こめかみの後れ毛を小さく掻き上げた。指先はそのまま陶子の髪の中に遊び、躊躇ちゆうちよのような、逡巡しゆんしゆんのような、緩慢な仕種を繰り返した。指がひと梳き髪を掻き上げること、琥珀香は夜の記憶のように肌からほとびて匂い立った。

義弘は陶子を見つめ何も言わなかった。陶子には、元より言える言葉はなかった。ただこちらを見つめる切れ長の目の、目尻に射した血の赤みを、瞳の黒さを、その中に映る自らの影をじっと見つめた。義弘の髪に未だとどまる残り香と、陶子の肌に鮮やかに匂う香りとは、結び合い、狭霧さぎりとなつて二つのまなざしを繋いだ。

引き裂くように視線をそらしたのは、陶子の方だった。張りつめた糸が切れたように、目を背けるなり陶子は今にもその場に崩折れるばかりの急激さで、顔をうつむけた。光を激しく乱舞させて、黒髪がなだれを打って膝に落ちた。義弘の指に絡んでいた髪も身をよじらせて逃れ、一閃の瞬きをひるがえして落下して行つた。

不自然な静寂が、澱おりのように部屋に沈んだ。髪の方こうに義弘の戸惑う気配がかすかにしたが、その表情までは、影に滲んで窺うことは出来なかった。黒絹の縦糸の隙間から見えるのは、かろつじて灯火の炎のゆらめきだけだった。そして陶子は、波となつて突き上げる胸の苦しさにかけて泣き出してしまわぬように、黒髪の覆う薄闇の中に身を沈め、両手を固く握り合わせて唇を噛みしめた。

(十四)

義弘の手が触れた。首垂れ、唇を噛む陶子を包み守護する黒い薄絹を、義弘は手で触れ、そして静かに撫で下ろした。鳥が飛び立つのを見ては涙を落とし、雨音を聞いているのは笑みを浮かべるような、陶子がたまさか見せた捕えどころのない少女の心のさざなみに、一度として臆したことの無い義弘は、今も乱れる陶子の心の前に勇敢であつた。小鬢へ、そして額へ、うなじへと、義弘の手はおもむろに動いた。仕種はひどく緩慢で、そこに義弘の意志は働いていないのではとさえ、思われた。

手は一枚の影絵となつて髪の上を滑つた。時折、灯火の加減が爪が白々と光り、陶子の目には玉藻に絡んだ真珠のように見えた。爪の美しさも手の優しさも、陶子には苦しかった。黒絹の奥処おくがに陶子は孤独であつた。苦しさに身を灼かれひとり震える陶子に、しかし義弘はただ黙つて、無慈悲な優しさをその髪に与え続けるばかりだつた。雨の音はもはや遠い。さつきまで聞こえていたと思つた梢のざわめきもやんだ。五月雨の雨音の代わりに今は髪をさぐる衣ずれだけが、さやかに耳元に寄せ、また遠のき、そしてやがて、その音すらも消えた。

「 陶子殿」

義弘の声がした。聞いたことのないような声であつた。陶子は応えなかつた。応えるすべもなかつた。ただただ泣くまいと、それだけを心に念じ、琥珀香の馨かぐわしい香りのこもる中、身をこわばらせ自分の吐息だけをじつと聞いている。

沈黙が過ぎた。と、衣ずれがし、義弘が立ち上がつて背後に座つ

たのが分かった。手を伸ばし額の分け目に触れ、指で、垂れた髪を掻き分けた。それから、もう片側も。うつむいた目の前が覚めたように明るくなった。床に放ってあった梳櫛を拾い、義弘は今度こそ、陶子の髪を丁寧^とに梳き整えた。そこにはもはや謎めいたことも不分明なこともなかった。整然とした明晰な動作のみがあった。その手の動きは、闇の夜を越えて来た人を思わせた。首筋に櫛の歯がかすめた。冷たくなめらかな塗り櫛は、闇から現われた小さな、銀色に光る魚のようであった。間もなくのうちに髪は何事もなかったかのように梳き直され、元結いで束ねられた。水櫛を濡らし、義弘は生えざわや鬢の辺りをきれいに撫でつけてくれた。

「陶子殿、済みました」

義弘が言った。陶子は何と答えてよいか分からず、黙ってうつむいたまま、ぎこちなく頷いた。義弘が後ろから手の中に櫛を返してよこした。陶子はそれを、意識せぬままほとんど手の反応だけで櫛箱にしまった。ふたがぶつかって耳ざわりな音を立て、陶子は手の震えを悟られまいと急いでふたを押さえた。

「遅くまでお引き止め致した」

櫛箱のふたを、指先が白むほどきつく押さえている陶子の背に、義弘は低く言った。

「どうかもう、お休み下され。わたしも陶子殿の言に従い、休むことと致します」

それから隣室の宿直^とに声をかけ、侍女を呼ばせた。侍女はすぐに来た。やって来た侍女に、陶子は耳だらいを片づけるようにと機械的に言いつけ、自分は櫛箱を持って立ち上がった。杉障子を引き開

け部屋を出て行こうとした時

「 陶子殿」

義弘が呼び止めた。足を止め振り向いた陶子を、義弘は刹那の間ひたと見つめ、そして包み込むように笑んだ。

「陶子殿、このふた月、愉しゅうござった。北嵯峨での日々は忘れませぬ。権大夫にとって、生涯の思い出となりましょう」

それは昨日までと何ひとつ変わらない笑顔、初夏の陽光の閃くような、陶子の最も好きな笑顔だった。

「 嬉しゅうございますわ」

陶子は、やっとそれだけを答えた。胸に迫る思いを吞んで、精一杯の笑みを返し、そして、少しためらってから、

「わたくしも、生涯忘れませぬ」

短いひと言を、言い置いた。一瞬、声が乱れ、陶子は侍女の脇をすり抜けるようにして廊下へ出た。

部屋に戻ると、雨音が来た。雨はじき嵯峨野を通り過ぎ、洛中の方へと遠く去った。廊下に出て陶子は舞良戸を一枚繰った。待つうち、再び嵯峨野の地を五月雨が覆い始めた。塗り込めた夜の中に雨の音が満ちた。池水のみなものが騒いでいる。木々の葉が濡れて燐光のように薄く光り、雨に打たれながら身を震わせている。廂からしとんと落ちる雨だれが、ためらいがちの足音のようである。何か花の匂いが流れている。闇の中に庭の景色が彷彿とした。 陶子

に、今川の親戚筋である渋川の家との縁談がまとまったと父より告げられた、それはちょうど、十日前のことであった。

陶子は夜空を仰いだ。月もない空に、見えるのはただ闇である。^{けが}穢れを知らぬ漆黒の闇は天へ向かってひたすらに深く広がり、何処^{いずこ}で果てるとも知れぬ。地上に音は満ちながら、しかし雨は闇に呑み込まれ、陶子の目はその姿を捕えることは出来なかった。ひとりたたずんで、陶子は夜の中にいつまでも五月雨の音を聞いた。雨は陶子の衣を濡らし髪にこぼれ、今は一糸も乱れず結い上げられた黒髪を、涙の粒となって滑り落ちた。

翌朝、義弘はいとまを告げ堀川の屋敷へと戻った。義弘とはその後会う機会もないままに、次の年の春、陶子は渋川へと嫁いだ。それから十七年の月日が経つ。夫となった人との間に陶子は二人の息子をもうけた。その息子たちが成長した今も、琥珀香はその香りを白磁の小瓶に封じている。七年前、応永の乱で義弘は帰らぬ人となった。香をくれた人はもうおらず、目に見えず触れることも出来ない香りだけがありありと眼前に残っているのが、陶子には不思議に思われる。そしてあの五月雨の夜以来、陶子は未だ何びとも、髪を解いた自らの姿を、見せたことはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4002m/>

さみだれがみ

2010年10月10日16時58分発行